

James 文学にあらわれる女性像

——女性像とその特徴を通してみる女性観——

析 原 知 雄

I

今回は、Henry James の主要な作品にあらわれる女性像を考察し、その特徴を通して James の女性観を論述してみようと思う。先ず女性像ということであるが、James の場合は作品に登場する女性 (female characters) を像と呼ぶことは不適當ではないように思うのである。ところが、現代文学でも、例えば、実存主義文学のある種のものとなると、その文学作品に出場する女性は、おそらく、像とは言い難いであろう。所謂、女性像とは全く無縁であって、あるのは男の性を備えた人間と女の性を備えた人間とだけであろう。だから純潔性だとか、節操性とか、優雅性とか、幻想性だとかを女性の特徴とみるというようなことは無意味だろうし、浮気女とか純情派の女性だとか、女性の型を考えたりはしないだろう。又、男女同志、相手に隣みをもちもしないだろうし、更には献身的になったりはしないだろう。「女がそこにある」だけである。こうして、最近の現代文学においては女性像の占める場所は狭まるばかりであるが James の場合は、近代作家達、例えば、英国なら Charles Dickens とか、William Thackeray とか、George Meredith とか、Thomas Hardy とか、米国なら Nathaniel Hawthorne の作品に出場する女性像の場合と同様に、人間（女性）を個人の歴史において扱っているし、又、その象徴においてみるのである。しかも、James の女性像は、今あげた作家達の各各の女性像とも違ったところがあるのは当然のことであって、筆者がこれから論述しようとする目的もそこにあるのである。

James の死後、約半世紀が過ぎる間に、James に関して、又、James 文学に関して諸種の評論が書かれ、多くの研究書が出版された。そして、色々の立場から James が考察され、研究され、批評され、James ブームがようやく経過した今日では、内外において James が小説芸術の巨匠であるということ、又、現代文学への関連と大きな影響をもつ小説家であるという評価は決定したようである。しかし、それでも猶、毀誉褒貶は単純ではない。James を貶す側の批評家の共通点の一つは作中人物の問題である。この人物問題を整理してみると大体、次の二点となるようである。一つは、代表として F. M. Forster の評言¹⁾を取ってみると、「作中人物として僅かの手持しかない。」それに、「人物の数において少ない。」という見解であり、他の一つは Somerset Maugham が代表するもので²⁾、それを要約してみると、James の人物は血肉を備えた人間だとは思われない。又、James の人物は、作者同様 (James は窓辺に立って人間生活を観察し、更にその上、友人や知人たちから聞いた話を素材として、小説を創作したので) 人生の悲喜劇中の役者として人生劇場で活動しないと言うのである。この二点については全面的に反対はしないが、筆者自身の見解も度々論述発表してきたから³⁾ それにゆずることにするが、一言 James のために弁明の労を取っておこう。James の全作品には老若男女 330 人を越える人物が登場する。そのことを読者や批評家は知り尽くしているのだろうか。従って、作中人物は数において少ないとは勿論言えないのである。僅かの手持しかないと言う Forster の見解は、おそらく、出場人物の数が少ないばかりでなく、出場人物の類型が多様でないと言うのであろう。Maugham

も James の描く人物は、いつも James のような口のきき方をすると評しているが、例えば James の描く悪人は、大変洗練された型のものとなることも筆者は認めている。Shakespeare のように “myriad-minded” とは言えないだろうが、James も諸種の人物を描いている。人生の悲喜劇中の役者として、人生劇場で活動しないと言う Maugham の批判も筆者は全面的に反対はしないのだが一口に言うならば James は、この現実の世界で人間達が「いかに生きているか」をただリアリティックに描写するのではなく、「人生いかに生きるか」即ち、人生を美的に倫理的に生きるのには人間関係はいかにあるべきかを描き出そうとするのである。主要作品に出場する James の中心人物（今回は女性を主とする訳だが）の生き方を解明して結論でこの点を詳しく論述しなければならぬのである。モラリストであり芸術家であった James の描く主要人物は、従って、甚だ象徴的な人間像となることが多いのである。

さて、James はどのような女性観をもっていたかをこれから論述して行かねばならないが、文筆生活50年という長い期間において、夥しい作品を書き残しているが（小説ばかりでなく手紙集、覚書、紀行類、評論も実に多量だが）そのなかで、まとまった「女性観」というような論説を書いたことはないので、James が、どのような女性観をもっていたかは作品中の女性像の特徴や、その扱い方から考察するよりほかないのである。従って筆者は James の主要作品中の女性像をいくつか取り上げて、その女性像の特徴を考察し、あわせて女性観をまとめてみる方法をとろうと思う。

次に、女性像を考察する前にもう一つ是非触れておかねばならぬことは James 自身と女性との実生活における関係である。周知のように James は一生結婚をしたことはない。そして、James の長い生涯において、今日まで知られている伝記その他伝記的資料において、どこを調べてみても女性との間に特殊な関係や交渉があった事実に出あうことはない。James の自伝的作品においても又、夥しい数にのぼる手紙の中にも何も発見しない。James は個人的なことについてはほとんど語らなかった作家である。唯、James の従妹であっ

た Minny (Mary) Temple と、ノートン家の Grace Norton と、James を敬愛していた女流作家 Edith Wharton の三人が浮かび上がって来るくらいのものである。作品中の人物像と最も関係の深いのは Minny (Mary) Temple⁴⁾ であるが、それも今日で言う恋愛関係というほどのものではなく（恋愛といえはいえぬこともなかろうが）それよりもむしろ、深い清い友情、永遠の友情とでも言うべきものであったろう。そして、この女性が James の作品と密接に関連する人物で、“The Portrait of a Lady” (1881) に出場する Isabel Archer と “The Wings of the Dove” (1902) の Milly Theale の原型 (prototype) となることは James の読者の知るところであろう⁵⁾。次に、Grace Norton であるが、この Miss Norton は James にとっては「腹心の友」(confidant) の役割を果たした女性である。それも主に二人の書簡を通して知ることができるくらいである。Grace も色々悩みを打ち明けたし、James も信頼し得る友として色々のことを相談している。Mrs. T. P. O'connor が語る二人に関する逸話のようなものが残っている⁶⁾。要約すると、James と生涯の友人で、大変機知に富んだ或る夫人に、何故 James は結婚しなかったのか尋ねた時に、その夫人は返答した。James は結婚などしたいとは思っていなかった。けれども一度婚約したことがあったけれども、先方が破談にしてくれたので James は喜んで、その女性と生涯の親友となったと言うのである。断定はできないが、この人は Grace Norton ではないか、という推測は当たっているかも知れぬと筆者は考えるのである。次に、Edith Wharton であるが、この人との関係では次のような一つの噂が残っている。これは W. L. Phelps の言ったことである⁷⁾。或る Dinner Party で Wharton が James と同席をしていた時に、或る新聞社から噂の真偽を質す書面が Wharton に来た時 Wharton が大きな声で、その書面を皆の前で読んだことがあった。「あなたは Henry James と婚約していますか。」と言うのであった。これに対して James は洗黙を破って次のように叫んだ。（叫ぶなどというのは James には珍しいことだったろうが）「真理は小説より奇なり。」けれども、このような

噂を残している二人の関係も小説芸術における師弟関係の敬愛のようなものであったに相違ない。時に James は 60 歳を越え、Mrs. Wharton も 40 歳を越していた筈である。この他 Constance Fenimore Woolson の交友があった程度である。James 自身と女性関係で特筆すべきものと思われるのは、僅かに以上の程度に過ぎぬものである。James は幼時から母 (Mary Walsh James) や妹 (Alice) や女家庭教師などに接していたが、女性に心を打ちあけて話すことはなかったらしい。James の美貌と名声と女性に対する礼儀正しい魅力ある態度のため James の周囲にあつまった女性の友人は少なくなかったようであるが、James の方からは一生涯女性を敬遠していたようである。James の次のような言葉の端くれからでもそのことはわかりそうである。即ち、“I have loved France as I have never loved woman.”

II

一生涯結婚をしたこともなく、又、特殊な女性関係も女性との交渉もなかった James が多量の作品中において、女性の繊細な感情や情緒や心理を見事に描き出したことは、まことに興味のあることと言わねばならない。先ず最初に、習作時代と名づけてもよいと思われる 1870 年までの James の作品中の女性について考察をすると、この時期には James の女性には顕著な特徴は出ていないが、女性に対して疑惑を感じ、若い女性を危険視する傾向があるようで、これは若い頃の James の漠とした女性観ともいえる。ところが又、この反面に女性を純真無垢として崇高視するところもある。従って、作品中に描き出した女性像にはこの二つの型があると言える。それにこの二面性を一人の女性が同時にもつものとして描き出している例もあるのである。この女性を危険視する一面の背景には当時のピューリタニズムの影響がないとは言えないので、この点 James 文学の特質を研究するに当たって欠くことのできない重要な一面と考えられる。James の年少の頃の父 (Henry James Sr.) の教育の影響を忘れる訳にはいかない。この父の哲学的、宗教的影響については詳しく論述を重ねてきた⁸⁾のであるが、James の女性

観と無関係ではあり得ないと思う。James がどのような結婚観をもっているか考察をしてみるに、どうも結婚というものは義務的で拘束力の強いものだという視方をしているようで、この結婚観は初期から後期に至るまで変わっていないようである。従って、例えば、姦通 (adultery) というものは不可知的なものではあろうけれども、それは明らかに罪 (sin) だという考え方を強く保持している。

“The Story of a Masterpiece” (1868) の Miss Marian Everett のように恋愛遊戯を事とする女性には男性には危険である。“The Romance of Certain Old Clothes” (1868) 中の Rosalind も危険な女性の型で、この女性は男性にとって危険であるばかりでなく、女性にとっても危険な女性である。この作品は多くの点で、Hawthorne の影響の強いもので、この物語に出る幽霊は、後年の James の幽霊と違って甚だ怪物的である。女性が危険な有毒だという考え方が強く出ていると思われる例は “A Most Extraordinary Case” (1868) の Caroline Hofmann という名の 25 歳の処女である。この女性が Ferdinand Mason という純情な青年に及ぼす影響は有毒でさえあったと考えるのであろう。女性を危険視し有毒だと考える一方その反面、純真無垢だという考え方が並存している型の女性を求めるならば、“De Grey: A Romance” (1868) の Margaret Aldis であろう。この物語は James の特徴をよく表わしているものの一つであるから、読者のためにその粗筋を述べてやや詳しく触れておこう。即ち、De Grey 夫人は亡夫の友人で、神学者の Father Herbert と New York 近くに住んでいる。夫人の息子 Paul がヨーロッパに遊学しているので、青春の気を家庭に入れようと美しい孤児である Margaret を引き取って一緒に生活をする。この若い女性は夫人から Paul の話を色々聞かされているうちに、未だ見ず知らずの Paul に興味を感じるようになる。Paul はヨーロッパでのフィアンセ (fiancee) を亡くしてヨーロッパから帰国する。Paul Margaret と親密になり結婚することを誓うのである。けれども Father Herbert が、De Grey 家には先祖から呪いがまつわっていて、この家系の男

性はすべて倒れてしまうと話すのである。だが、Margaret は勇敢に Paul と結婚をする。すると、やがて Paul は病気になり、衰弱して死ぬのである。Margaret は狂ってしまう。という物語であるが、この女性には相反する二面性が現われているのである。どうもこの物語も James の習作時代の荒削りの怪奇性が強いようである。習作時代の女性観には何か漠としたものがつきまとっているようである。

習作時代が過ぎて1870年頃をむかえると James もいよいよ作家として出発をすることになる。1870年という年は James 個人にとっても忘れ得ぬ年であった。即ち、James が滞英中に最も厚い友情をかわしたあの Minny (Mary) Temple の死の知らせを受けた年である。James の悲しみは一通りではなかった。この悲痛な思いを二つの手紙に書き残している。一つは、母 (Mary Walsh James) へ宛てたもので、他の一つは兄 (William James) に宛てたものである。詳細は拙稿にゆずるけれども⁹⁾、James は Minny の幻想がつきまとして終生離れなかったのである。これが、James が前述の Isabel Archer と Milly Theale という二人の女性の理想像を創ることになる。James は1883年頃までに、後期との関連においても又、後期の作品との対照的な面においても注目すべき作品を書いている。そのうちから女性像の研究として目ぼしいものをいくつかあげて考察を続けよう。“Watch and Ward” (1871), “Roderick Hudson” (1876), “The American” (1877), “Daisy Miller” (1878), “Four Meeting” (1879), “A Bundle of Letters” (1879), “The Diary of a Man of Fifty” (1879), “Confidence” (1880), “Washington Square” (1881), そしてこの期の傑作である “The Portrait of a Lady” (1881) 等である。

まず、“Watch and Ward” であるが、この作品は Edel 教授の所謂 “The Untried Years”¹⁰⁾ が過ぎて James 28歳頃の作品である。1871年8月から12月まで *The Atlantic Monthly* に連載されたが、書物の形をとって発刊されたのは “Roderick Hudson” と “The American” の二つの作品が出た後のことである。詳細は拙稿にゆずるが¹¹⁾

この作品は、作者自身後になって好まず、“Roderick Hudson” を最初の長篇とし、*New York Edition* には除外して入れなかったのだけれども James の特徴を知るのには、おろそかに扱えないのである。Dupee の所謂 “rough and laboured”¹²⁾ な作品であるとしても James の女性像、男性像を知る上において又、作家 James の誠実を知る上においても捨て難いものなのである。この作品の主人公は男性 Rogar Lawrence であろうが、ヒロインの Nora も James の女性像として興味あるものである。Nora は孤児で Roger の養女 (被護者) となる。Roger は Nora を学校に入れる。成長して Nora は見違えるほど美しくなる。作者はこの Nora に三人の男性 (Roger とその従弟で牧師である Herbert Lawrence と Nora の遠縁に当たる George Fenton) を配するのであるが、Nora は最後に保護者 Roger の腕の中へ帰り妻となるという珍らしく Happy Ending となるのである。作者は Roger を気の弱い、女性に対して、自信をもてない人物として描いているが、Nora はそれに対して、むしろ「浮気女」の型として描いている。(もっともこの反面、初期の女性観の特徴として、純情なところもある女性として描いている。) 今日の女性観察からすれば「浮気女」とはみなさないだろうし、作者はにえきらぬ Roger を配しているので Nora の動き方に興味があるとも言えるのであろう。“Daisy Miller” の “innocent” と “flapper” の二面性をもっている女性の型である。James の読者の知るように、James は作品の中で意識的に性強調を行なわないし、多くの作品を読んでみても性行動の描写とか「不潔な言葉」とかに会うことはないのであるが、この作品はそういう James の特徴の作品の中では、比較的 “oversexed individual” として男性 (特に Herbert) を描いているところもある。だが、それでも随分ひかえめにしか描写をしないのである。このようなテーマは、例えば、André Gide も *La Symphonie Pastorale* (1919) であついているし、近くは、Vladimir Nabokov が *Lolita* (1956) であついているが、読者の知るように *Lolita* は “conscious sexuality” の横溢したものである。これは James と Nabokov との

対照を（性を扱う場合）ははっきりと示していると言える。James 文学の特徴の一つがここにもあらわれている。Nora が成長して美しくなった時、Roger が勿論、勇気を出して、はっきり自分の心の中を披瀝すればよいのだが、James の若い男性は多くの場合用意周到で、ひかえめで、勇気がない。従って、James の男性は「カリカチュア」となることが多い。若い James が若い男性像に投影されている場合は、かなり多いようである。

“Nora, I care for no one, I shall never care for any one, but you!” この Roger の言葉に対して Nora はこう答える。“Roger, if you don't wish it I promise never, never never to marry, but to be yours alone,—yours alone!” ようやく 16 歳になる Nora の答えとしては上出来である。自分よりずっと年上の若禿の Roger に世話になっているためもあるが、こう答える Nora の一面には本来純情な面を備えている。何か日本の義理人情に近いものを感じる読者もある。Roger と Nora の関係は、George Sand の *La Mare au Diable* (1848) の Germain と父無し子の Mary との関係とよく似たものである。

III

James 自身が、自分の最初の長篇だと言っていた “Roderick Hudson” は、James Joyce の言葉をかれば “A Portrait of the Artist as a Young Man” であると言える。この小説は女性が主人公でも中心人物でもないが、アメリカ (New England) とヨーロッパの対照的な型の女性たちが出場する。小説の主人公は男性だが、それは Roderick Hudson であるよりも、むしろ、Rowland Mallet である。Rowland は収入があり、知的で理解力もあり、それでいて繊細な感受性をもち、自らの未来をえらぶことのできる人物であるが、政治を軽蔑し、ビジネスに関しては興味などもない人物である。オランダかイタリアの名画を、どこかの都市の博物館に寄贈するようなことを夢想する人物である。そして、前途有望と思われる Roderick Hudson という若い彫刻家に投資してヨーロッパで彫刻の修業をさせようと思いつく。

そして、自分の果たし得ない夢を実現し得られる若い芸術家に投資して、自己表現の一形態を発見しようとする。Roderick は出発前に New England の Mary Garland と婚約する。ところがヨーロッパに来て、ローマで Christina Light というヨーロッパきっての美人と知り合う。この女のために Roderick は芸術家としての修業を怠り彫刻家として蹉跌をきたすことになる。アルプス山中で、事故死とも自殺ともわからぬ死をとげてしまうのである。Roland は破産した劇場のような空虚な暗黒の時点にたたずむことになるのである。多読な読者なら Mary は Nathaniel Hawthorne の “The Marble Faun” に出場する Hilda に似ていると思うであろう。本質的に New England の女性像である。New England の田舎風な娘であって、ロマンティックな性質であるが、又どこか、ピューリタンの気質をも十分備えている。清純なモラリストである。このような女性像は James のアメリカ人の女性像には多く、“The Four Meetings” のヒロイン Calorine Spencer もその代表的な一人である。Mary は New England を離れて、Roderick に一年おくれてイタリアに到着するのであるが、はじめて旧世界の印象に感動する。異郷の文明は最初は、むしろ、恐怖でさえあるが、やがて、驚異となり、遂には美への感動と変る。道徳的意識が美意識へと移動し躍動する。James はこのピューリタンの清純な心とヨーロッパの審美感の結合せる女性を理想の女性像と想定しているようである。後者の Christina はヨーロッパの旧社会が生み出した虚栄心と物質慾に満ちた女性像で、James が微に入り細を穿って描写する女性の型である。背徳と驕慢の女性像である。James の描くこの種の若い女性はほとんど美人でコケットであるが、又、時には、この種の女性は実に聡明な女性像となる。自分の置かれている環境の腐敗と自分の悪徳を自覚している。他人を苦しめると同時に、自分も悩みをもつ女性である。異国風な魅力を十分備えているが、どこか不吉な魅力のただよっている女性である。

次に “The American” に登場する女性の中から代表的な四人をえらんでみよう。Mrs. Catharine Bread と、Mrs. Tristram と、Clare de Cintre と

Madam Bellegarde である。この作品の主人公は Christopher Newman という男性であるが、上述の四人は James の特徴ある女性像である。Mrs. Bread は James の描く或る種の confidant で、Bellegarde 家の召使（侍女）でありながら Newman に好感と厚情をよせる女性で、この女性の描写は実に巧みで、筆者は幼少の頃の乳母を憶いおこすのである。好感のもてる James の女性像で James 独特のものと思う。他人の心の中をくみとって同感と同情をよせる年寄の女性像である。又 Mrs. Tristram も James の所謂 confidant の代表の型で¹³⁾ Newman が何でも打ち明けて話せる信頼のできるいたって親切な細君である。次に、Madame Bellegarde はヨーロッパの sophisticated な悪性の女性である。Honoré de Balzac の作品によく出る型の悪女である。Clare de Cintre を老侯爵とむりやりに結婚させようとしたのはこの女性であり、それに反対した夫を自分に味方している長男と共謀結託して殺しさえする悪辣な女性である。（夫殺害の動機はこの小説では最も不鮮明な個所である。）最後に Claire de Cintre であるが、この女性は Newman がヨーロッパに来て発見した理想の女性であるが、この女性の性格と行動も不鮮明なところがあり、（この作品ではこの女性を描くことが目的でなかっただろう）、それが、かえってこの女性の特徴であるとも言えるかも知れない。「にえきらない」という通俗語がよく当たる女性の型である。読者によっては血肉を備えた女性ではないと言う見解が生まれる女性である。Claire と Newman の婚約を破棄する代表者 Madame Beregarde の理由は明瞭でない。「私達はあなたの経歴に反対なのです。」というのが言葉の上で受け取れる反対表明である。輝くばかりの美しさを保持している Claire との婚約に満足をしていたし、結婚にたいする計画があまりに完成していたし、幸福の見通しが豊かであったために、Newman は Claire その人の口から真実を聞きたいと思って困難を排して Claire に会いに行く。Claire は Newman の目をみつめ、Newman の手を取るに任せたが、その目は雨降りの秋の月のようにであった。手の感触は不吉に冷たかった。Newman が不当な取り扱いを受けたこ

とに同情している。「私は本当に人様を傷けたことは無いつもりでございます。とにかく意識的に傷けたことはございません。こんな冷酷な仕打ちをしてしまいましたあなたに対して、私のできます唯一つの償いは、『私にもよくわかっております。又、感じております。』と申し上げることだけでございます。あわれな取るに足らぬ償いではございますが。」「お目にかかっても、何の役にも立ちませんけれど、それでもおいで下さったことは嬉しゅうございます。それは身勝手な喜びでございましょうが、私の最後の喜びとなりましょう。」Claire は涙に濡れた大きな目を Newman にじっと注ぐのである。会話は猶続くのであるが Claire はこんなことも口ずさむ。「私という女は、充てがわれた仕事を喜んで感謝しながらして行くようにつくられております。母はいつも親切にしてくれました。母について言うことは他にございません。母を批判したり、非難したりするのは間違いです。そんなことをすれば、きっと自分に返ってまいります。この私には変りようなどございません。」「あなたは私と違って、男でいらっしゃる。そのうちにお忘れになります。……でも私はいつもあなたのことを思っております。」Claire の最後の言葉は「苦痛もない、悪事も行われていないところへ参ります。この世と別れて参ります。」と言うのであった。この世と別れるとは「尼寺へ参ります。」ということなのである。こうして婚約の命の綱も切れることになる。死ぬまで黒衣をまとして、白いベールをつけてみ恵みがあれば生涯修道院の暗いかべの内にとじこもるというのである。Claire が何故カルメル会の尼寺へ行かねばならぬのか読者には不明なところである。「私の家には呪いがあります」と言う Claire の言葉がいくらか暗示しているに過ぎない。Claire は James の描くヨーロッパの女性の中でも従順と言うか、むしろ個性のない女性のように読者にうつる。自己主張をしない型の女性で、「母の命令です。」と言う Claire の言葉を聞くと何か読者は明治時代の日本の旧家によくある従順な個性を出さない娘のようにうつるかも知れない、勿論、この小説はリアリスティックなものでなく Mangham の推奨する推理小説的な興味をもつロマンスであって、この

点については James 自身が自序の中で述べているところである。だから、読者もロマンスの属性をもつ物語として読みとらねばなるまい。Oscar Cargill も指摘しているように¹⁴⁾ James は遁世のためと聖職につくために入る修道院との意味がよくわからなかったのだろうということもできるだろうが、James はそこまでは考慮しないで Claire を修道院に入れたのであろう。Claire から Newman を止むなく引き離す状態に置くためであったのだろう。又は、このような状況にあった二人が容易に結び合えないものであることを暗示するためであったのであろう。或は又、Ivan Turgenev の Lisa という女性が James の脳裡にあって、何か宗教的な献身というようなことが脳裡に浮かんだのかも知れない。James の戯曲 “Guy Domville” の主人公の場合にもこれと同様の状況がおこっているのである。Claire の “I’m as cold as that flowing river !” という言葉が何か響をたてて流れているようである。

IV

James は生涯において二度自分の作品の水準を向上させたと言えるだろうが、最初は38歳の時書いた “The Portrait of a Lady” においてであり、二度目は58歳をむかえねばならなかった。即ち、後期の三大作 “The Wings of the Dove”, “The Ambassadors”, “The Golden Bowl” を書いた時であった。“The Portrait of a Lady” の Isabel Archer から考察をしよう。最初に描き出される Isabel は若いアメリカの女性らしく自信に満ちている。性格は率直であり、機知に富んでいる。感受性が強く想像力が豊かで、自分の将来に夢をもっている。このような女性は James が常に若いアメリカの理想の女性像として想定するものである。精力的な、そして行動力のある Goodwood を尊敬はしているけれども、何か反発を感じていて Goodwood に求婚された時には拒否する。Mrs. Touchett からの招待でヨーロッパに来てからは、その文化の豊衍さに鋭敏な感受性が刺激される。ヨーロッパに来て、アメリカでは見ることでできなかった教養と人間味豊かな男性に出会う。ヨー

ロッパまで後を追って来た Goodwood の求婚を再び拒絶する。イギリスの貴族の Warburton の人間味豊かな愛情を感じるのだが、この人物にも何か反発を感じるので、自分の愛情を追い払って Warburton をも拒否する。この Isabel の心理と行動は、ひたむきに真面目な人間の中に浮遊する人生観につきまとうものかも知れぬ。同時に、女性の結婚による受動的な生き方にも反発しているようである。このような女性は結婚生活には容易に入りこめないのである。禁慾的な（ピューリタンの）考えが動いている。女性であっても、能動的に行動し、人生において出会う不幸や苦悩に対しては積極的な態度を保持し、それと対決して行こうとする。そして、対決と闘争の後で、生の充実感とでも言うべきものを味わう。自分の運命と面と戦って、生を経験したという意識を自ら味わって、自分の精神史の発展を貴重なもの考える。だが、それにもかかわらず、Isabel は決して恋愛感情が欠如しているのではない。だから若しこの恋愛感情を起こさせてくれるような男性が現われたら勿論結婚する意志をもっていると解することができる。Warburton は、この感情を起こさせるに十分な人間性をもっているが財産家である。普通なら問題ではなく、かえって喜ぶところだろうが、Isabel はこの財産家というところにひっかかる。つまり、結婚すれば実質的には財産目当ての結婚とみなされるおそれがあり、又、そのようなことがつきまとう限り慎重な Isabel の内にもつ強い正義感にも優雅さにも食い違いが生ずる。従って、自分の個性の抑圧をきたすことになる。ところがこのような Isabel が結局結婚した男性とは誰だろう、表面は娘と二人でフロレンスに住んでいる全くヨーロッパ化されたアメリカ人 Osmond である。用意周到な Isabel が結婚の相手を見損うのである。容貌のよさ、見せかけの精神主義者 Osmond は実は冷酷な物質主義者に過ぎなかった。Isabel が Osmond の正体を見抜けなかったのは Osmond に愛の幻影を抱いていたためであつたらう。このような状態に置かれている時に、Goodwood の同情と再三の厚情をさけたのは唯「性」への恐怖心ばかりではなく、再度の結婚を現実には当てはめることの恐怖心からでも

あったろう。それに、人間関係における義務という立場を深く考慮する Isabel は遂に Goodwood の厚情に背をむけて、自由選択の重荷から逃れるかのように sophisticated な夫 Osmond の下へ帰って行くのである。Grace Norton がこの作品を読んで、Isabel は Minny がモデルになっていることを認めて、James に手紙を書いて送った時に James は次のように返答している。要約すると、Isabel には Minny の顕著な性格に関するかなりの印象が注入されているけれども、それはあくまで “a portrait” ではない。気の毒な Minny は本来病気で “incomplete” である。だが、私が描いた若い女性 (Isabel) はもっと “rounded” で、もっと “finished” なものであると言うのである。

次に考察するのは、“The Wings of the Dove” の Milly Theale だが、この女性は Isabel よりもはるかに Minny その人に近いところがあるようだ。Minny も孤児だったし、Milly も小説で孤児として出場する。けれども、Milly は小説 (芸術) の現実の中ではしっかりした役割を果たすのであり、実人生における生活のペース (pace) とは違ったペースで生活する。James の考えによれば、芸術は人生より制限されたものであり、限定されたものだから、芸術は人生より常に真実だということになる。小説中の女性像 Milly と James の自伝中の Minny とは、小説の肖像 (小説の “art”) と (伝記の “art”) の相違である訳だし、Minny に余程近いと言っても勿論、Minny その人とは更に相違のあることと考えられる。James は Milly という最も余韻豊かな象徴を創り出したと言うことができる。Milly の悲劇は又 James の悲劇でもあったのである。この作品では、作者は、この Milly と対照的なもう一人の女性を示してくれる。それは Kate である。この女性は作品の中では、最初考えた “Note” の構想に描いたような、冷酷いってんばりな悪女としては描いていない。善悪の混合した美人で、甚だ旺盛な生命力をもっている。外形の (肉体の) 上から言っても、Kate は頑健で、(Milly は繊弱)、人目をひく美しさ、清潔な肌、整った顔形をしている。これに較べると Milly を美しいといもうのは多分、アメリカ人のひたむきなところにひかれる人だけだろう。

又、行動においても対照的である。鳩のように柔和な Milly と豹のように歩き廻る Kate を読者は眼前に浮かべるであろう。Kate の意志の力は、マクベス夫人との共通性を思わせるものがある。James が Milly は Minny のように探究心の強い又、信仰を深く求める女性として描かなかったのは、Matthiessen が見事に指摘しているように¹⁵⁾ 「人生の戦場での熱烈な戦士が打ち勝ち難い障害を敵とする時、はりつめた Milly のアメリカ人としての神経がヨーロッパは手強過ぎると感じること」が James の意図したテーマに必要なものであったのだろう。

V

いよいよ James の女性像に関する見解を整理し結論にみちびかねばならぬ段階にきた。James の全作品 (長篇 20篇, 短篇は 100篇を越え, 他に劇作品 16篇) に出場する人物は 330人を越え, その過半数は女性である。その中から筆者は、今回は、代表的な女性像を選び出して考察をしてきたのであるが、十分論じ尽くしたとは言えない。けれども、重要な女性像は一応とりあげてみたのであった。James の女性像にも勿論、善意のある型の女性と、悪意のある型の女性とがあるが、この James の善女と悪女の型はやはり James 独特のもので悪女も大変洗練された性質のものである。James のような口のきき方をするもののあるのに読者も気づくであろう。善女は筆者が考察し、見解を述べてきたように、James の描く理想像に最もよく現われる。又、James の “confidants” に現われる。文字通り悪女という型の女性はあまり出場しない。その悪女の代表的な例は “The American” に出場する Madame Bellegarde で既に論述したように夫を殺害する悪女である。他にもう一つ例をあげると、“The Other House”¹⁹⁾ に出場する Rose で、Effie を殺し Jean にその罪をぬりけつる女性である。この作品では二つの型の女性が出ていてこの Rose が “the Bad Heroine” で Jean が “the Good Heroine” である。これほどの悪性でなくても (a) 浮女者であったり、(b) 金銭のために男性を裏切ったり、(c) 婚約を破って男を自殺

させたり、(d) 男性の活力を奪い去ったり、(活力を奪われることは芸術家にとっては特に致命傷である。) (e) 虚栄心がやたらに強かったりする女性の型が描かれる。James の作品には読者も知るように、よく未亡人が登場する。はじめから未亡人の場合もあり、途中で未亡人となる場合もあるが James の描く未亡人は、善女 (“the Good Heroine”) となって現われる場合が多いのである。そして James の場合、未亡人は大抵、美人で健康で力量のある女性像が多いし、そのような条件を備えている女性が未亡人となる運命があるようである。初期から後期にかけて James の作品を読み続けて来ると初期には “the Bad Heroine” の方が活動し、中期から後期にかけて “the Good Heroine” の方が活動し、その善意に満ちた女性が崇高性をさえ発揮するに至るのである。けれども James が初期にもっていた女性観（女性を崇高視する面と、危険視する面）は、中期から後期へかけてもまだ尾をひいているようであって、その興味ある事例は “The Diary of a Man of Fifty” の主人公であろう。これは50歳になる独身將軍を話者として、日記体で描かれている作品である。話者が27年前フロレンスにいた時、未亡人 Salvi 伯爵夫人と知り合いになるが、話者は夫人を非常に愛する。だが、内心この未亡人を全面的に信じきれないのである。女性に対する不信感と疑惑感である。遂に信じきれず夫人のもとを立ち去るのである。27年後再び独身のままフロレンスを訪れる。未亡人は既に他界しているが、昔の邸宅は残っており、母と同様の美人の娘（これも未亡人）が住んでいることがわかる。この娘と親密にしている或る英国青年と、27年前の青年の頃の自分との相似性を強く感じる。話者は昔と同様の疑惑感で、この娘も危険な女性だと青年に忠告する。が、この青年は話者と違ってこの娘を信じ勇敢に結婚をする。そして幸福に暮らしている二人と英国で会うという物語である。話者はこの青年と違ってあまりに疑い深く、用心深かったために幸福をとりながしたのであろうか。例によって James の喪失感 (“the sense of loss”) が濃厚に出ている作品であるが、James には女性の二面性を常に観る女性観があるようである。

又、James の善意ある女性の型には崇高性を発揮する母性型の女性も登場する。例えば “Watch and Ward” に顔を出す Mrs. Keith や、年は若い “The Birthplace” の Mrs. Hayes や、異常な心理をあつかっている作品だが “The Author of Beltraffio” の Mrs. Ambient 等をあげることができる。さて、いよいよ James の理想の女性像をとり上げる。James の理想像はアメリカの若い女性に多い。先ず、New England の道徳性と Boston の知性と New York の洗練とを兼ね備えた女性であろう。詳しく論述したように Isabel Archer と Milly Theale とはいずれも理想の女性像の代表人物である。それにできればヨーロッパの伝統の最も秀れたところを備えている合成体なら申し分はないのであろう。けれども読者も感知するようにこのような理想像は James が創り上げたもので、現実では求め得ない像と言わねばならない。現実の女性には到達し難いものであろう。真実の世界における象徴であらうし、James もその積りで描いているのであろう。James が特殊な生涯をおくり、特殊な経歴を歩んで来たために James の描く人物の理想像も、他の作家のものとは違った像が生まれ出た訳なのであろう。恋をして、結婚をして、子供を生んで、そして育てるこの世の大部分の女性の生き方をしているものの理想像ではなく、James が「人生を創るのは芸術である」として描写した絵としての人生の中の女性像とでも言うことができるかも知れぬ。それも James の色彩 (“color”) の強い絵である。その象徴の創り方が甚だ James 的なのである。その象徴化された女性の中に読者は James を発見するであろう。

註 1) 拙稿「James 文学とその批評——戦前における James 批評の動向と James 褒貶の分岐点——」(関西学院大学「英米文学」Vol. IX, No. 1. 1965)

2) (a) 拙稿「Henry James 作 “The Spoils of Poynton” 論——人生と芸術・いかに生きるか——」(関西学院大学「社会学部紀要」第7号, 1963)

(b) 拙稿「Henry James 作 “The Ambassadors” 論——豊衍な想像力と繊細な感受性と「技術」が生む作品——」(関西学院大学「社会学部紀要」第13号, 1963)

- 3) (2)の拙稿と同じ。
- 4) 拙稿「Henry James と Mary (Minny) Temple——Henry James の生涯と作風——
(関西学院大学「英米文学」 Vol. VI, No. 1. 1961)
- 5) (4)の拙稿と同じ。
- 6) “The Legend of the Master” compiled by Simon Nowell-Smith. (Constable, London. 1947)
- 7) (6)と同じ。
- 8) (a) 拙稿「ヘンリー・ジェイムズと宗教——文学作品にあらわれる「宗教意識」と「悪」の問題について——」(関西学院大学「論攷」第10号, 1963)
(b) 拙稿「宗教と文学——ヘンリー・ジェイムズの文学にあらわれる宗教意識——」(基督教文化学会年報 第11号, 1964)
- 9) (4)の拙稿と同じ。
- 10) “The Untried Years, 1843—1870” by Leon Edel. (Rupert Hart-Davis, 1953)
- 11) 拙稿「Henry James 作 “Watch and Ward” 論——この作品の性格と sexuality の問題——」(関西学院大学「論攷」第9号, 1962)
- 12) 11)の拙稿と同じ。
- 13) “The Confidante in Henry James” by Sister M. Corona (Sharp. O. S. U. Nniversity of Notre Dame Press. 1963)
- 14) “The Novels of Henry James” by Oscar Cargill. (New York, The Macmillan Company. 1961)
- 15) “Henry James——The Major phases” by F. O. Matthiessen. Oxford University Press, London. 1946)
- 16) 拙稿「文学における影響の問題——Henry James の場合」(関西学院大学「英米文学」Vol. IV, No. 1. 1959)